

【サクセス英語検定対策資料】

<TOEFL/Section2問題の傾向と解法ポイント>

◆TOEFL-語法・文法問題 作成の背景と特徴◆

TOEFLの語法・文法と言っても何か特別な文法が存在するわけではなく、中学・高校で学ぶ文法と本質的な相違はない。しかし注意しなければならないことは、TOEFLのSection2では、アメリカ留学でレポートや論文を書くのに必要な語法・文法 (Written English) の能力を試す、という前提のもとに作成されているということである。それゆえ「口語(Colloquial)表現」や「文体(Style)上好ましくないもの」は間違いとされる。その結果、一般既習の文法では許容されてもTOEFLの文法では誤りとされるケースが出てきてしまうので、そのための対策、すなわちTOEFLで扱う語法・文法の特徴を理解し、その有効な対策を考える必要がある。

いわゆる学校英語文法等で許されてもTOEFLでは誤りとされるものが、検定出題全体の約10~15%位あり、この中に含まれるのは ①文体(Style)の問題 ②口語表現 ③語法である。この点を含めてTOEFLのStructureのセクションは、要するに英語の「文」の「成り立ち」や「しくみ」(=「構文」)の基本ないし標準的な習熟度を見るものであるということが必要十分に意識した学習が必要である。

◆「文完成問題」のしくみ&アプローチ◆

「文完成問題」は、文字どおりにStructure(文の構成)への理解度が問われる。文の一部が抜かれ、その部分を正しく埋める能力が試されるのである。この能力は、具体的には「分析能力」と「構成能力」である。

《 中 略 》

次の例で具体的に見てみよう。

<例題>

The cell membrane is the boundary _____ of the interior of the cell from the outside.

(A) separation (B) separated (C) separating (D) separate

この文の主語は the cell membrane、動詞は is、補語は the boundary で、言うところの「SVC」型の文である。つまり、余白の部分は「修飾語」となり、下線部には、boundary を後から修飾する語(=後置修飾語)が入ることになる(分析能力)。

《 中 略 》

この分析能力と構成能力をきちんと養成するには、英語の「基本文型」の理解と基本文型からの文の修飾・拡大(=副詞・副詞句・副詞節の付加)、そして文の要素(=名詞・動詞・目的語・補語)の展開・拡大と修辭法を見極める力が必須と言える。

◆「下線部間違い探し問題」の出題パターン◆

TOEFL 出題の「間違い探し」にかかる語法・文法を網羅的に挙げることは困難だが、出題のねらいによる類型としてはある程度決まっている。以下に主なものを掲げるので、各例題となるものを自ら確認・学習しながら対策のポイント(着眼点)としていただきたい。

《 以下 略 》